

紫の上論

—— 主体的な女性像を求めて ——

豊 島 秀 範

一 はじめに

若菜巻での女三宮の降嫁は、それまで光源氏の愛情のみを拠り所として、六条院世界で正妻格の立場を維持していた紫の上のほぼ絶対的とみえた立場を相対化し、いとも簡単にくつがえしてしまつた⁽¹⁾。それも、光源氏の紫の上への心変わりが原因なのではなく、紫の上自身の心の持ちように因るものであつた⁽²⁾。

もとより、六条院の正妻として降嫁した女三宮が光源氏の信頼を得たわけではない。そのことは、紫の上も光源氏の言動から感じ取つていたはずである。にもかかわらず、女三宮の降嫁は、紫の上の立場を根底から揺さぶり、病を与え、やがて死へと導く原因となつたのである。

女三宮じしん、その降嫁によつて、それまでは味わつたこともない、男と女の関わりによる厳しい現実⁽³⁾に直面することを強いられ、皇女という高貴な女性の内面が、すべてあばかれていくのである。その結果、むしろ紫の上の美質が称揚されることになるのだが、そうしたことを自覚しつつも、なお紫の上の意識に回復はみられなかつた。それは、女三宮が皇女という争いがたい身分であつたことにもよるが、それ以上に、『源氏物語』の根底を流れる書き手の意図によるものであることはいなめまい。実の兄・朱雀院の皇女が、物語上に突然に浮上して光源氏のもとに降嫁するという仕組みは、紫の上の

立場をねらい打ちしたものの以外のもではありえないからである。

そうしてまで、紫の上の位置を揺らがせたのは何故なのであろうか。さらには、そうした物語展開を通して描出しようとしたものは何であつたのか、以下に述べることにしたい。

二 物語論の検証

『源氏物語』も〔物語〕である以上、書き手みずからが蜚の巻で展開している〔物語論〕から逃れることはできない。そこで、まず、その物語論から見ていくことにする。

蜚の巻には、「長雨例の年よりもいたくして、晴るる方なくつれづれなれば、御方々絵物語などのすさびにて、明かし暮らしたまふ」と、五月雨の続く中で、物語に熱中する六条院の女性たちが描かれている。その中でも玉鬘は、

西の対には、ましてめづらしくおぼえたまふことの筋なれば、明け暮れ書き読み、営みおはす。……さまざまにめづらかなる人の上などを、まことやいつはりにや、言ひ集めたる中にも、わがありさまのやうなるはなかりけりと見たまふ。

(日本古典文学全集『源氏物語』〔蜚〕三卷一〇二頁)

と、物語に人一倍熱中して日々を送っていること、そこに描かれている内容

について「まことやいつはりにや」という意識で読んでおり、それに自分の身の上を重ね合わせていることなど、おそらくは当時の子女の物語享受の姿勢にそった表現がなされていると想定してよいであろう。そうした玉鬘の物語によせる姿勢に対して、光源氏は「あなむつかし。女こそものうるさからず、人に欺かれむと生まれたるものなれ。こころの中にまことはいと少なからむを、かつ知る知る、かかるすずるごとに心を移し、はかられたまひて、暑かはしきさみだれの、髪の乱るるも知らず書きたまふよ」(同)と、直接的には物語を描写している玉鬘の様子を通して、物語を「すずること」「いつはり」と知りつつ「はかられ」ていく女性一般を対象として、苦笑いしながらも、批判的な言葉をはくのである。

この光源氏の言葉に不満をいだき、物語の書写にうちこんでいた自分の姿への恥ずかしさをも感じた玉鬘は、「げにいつはり馴れたる人や、さまざまにさも酌みはべらむ。たいたいとまことの事とこそ思うたまへられけれ」(三二〇四)と、「いつはり」に馴れている人(光源氏)を皮肉り、「いつはり」など知らない自分は物語を「まことの事」と思つて読んでいるのだと主張すること、自分の立場を弁護するのである。

この玉鬘の思わぬ反撃を受けた光源氏は、とまどいながら物語を擁護する姿勢に転じ、物語に寄せる本質的な意見を述べていくこととなる。それが以下の記述である。

「肯なくも聞こえおとしてけるかな。神代より世にある事を記しおきけるななり。日本紀などはただかたそぼぞかし。これらにこそ道々しく詳しくきことはあらめ。……その人の上とて、ありのままに言ひ出づることこそなけれ、よきもあしきも世に経る人のありさまの、見るにも飽かず、聞くにもあまることを、後の世にも言ひ伝へさせまほしき節ぶしを、心に籠めがたくて、言ひおきはじめたるなり。よきさまに言ふとては、よき事のかぎり選り出でて、人に従はむとては、またあしきさまのめづらしき事をとり集めたる、みなかたがたにつけたるこの世の外の事ならず

かし。他の朝廷のさへ作りやうかはる、同じやまとの国の事なれば、昔今の変るべし、深きこと浅きことのけちめこそあらめ、ひたぶるにそらごとと言ひはてむも、事の心違ひてなむありける。仏の、いとるはしき心にて説きおきたまへる御法も、方便ということありて、悟りなき者は、ここかしこ違ふ疑ひをおきつべくなん、方等経の中に多かれど、言ひもてゆけば、一つ旨にありて、菩提と煩惱との隔たりなむ、この、人のよきあしきばかりの事は変りける。よく言へば、すべて何ごとも空しからずなりぬや」と、物語をいとわざとの事にのたまひなすつ。

(螢 三二〇四)

長い引用文となつたが、その最後に「物語をいとわざとの事にのたまひなすつ」とあるように、光源氏としては物語を最大限に止揚することになつていゝのだが、引用したこれらの記述には、物語の質を考える上にきわめて重要な方向が示されている。

すなわち、物語は「神代より世にある事」で「道々しく詳しくきこと」「世に経る人のありさま」が描かれており、一途に「そらごと」とは言い切れないということであつて、それを仏教を説く上での「方便」にたとえて、「悟りなき者」は「煩惱」ゆえに「方便」に疑いをいだくであろうが、それは「菩提」を説くための方途であつて、物語においても「人のよきあしき」を描くのと同趣である、というのである。

以上のことを、より物語に引き付けて解釈すれば、「物語」は人の生きざまを説く上でのいわば「方便」であつて、煩惱にとらわれた「悟りなき者」のために「世に経る人のありさま」をさまざまに描くことで、いわば「(真実の生)」を考えさせようという意図が込められている、と受け取ることができよう。同時にまた、光源氏が語つた言葉のなかにある「御法」という語句が、紫の上の最後を飾る巻の名称になつているということは、紫の上を考えていく上で、きわめて暗示的ですからある。つまり、〈紫の上〉という人物は、「御法」を説くための「方便」の典型として登場した女性ではなかつたか、とい

うことである。

いうまでもなく、「方便」とは、①「仏が衆生を教化・救済するために用いるさまざまな方法」であり、②「真実の教えに至る前段階として教化される側の、宗教的能力に応じて説かれた教え」（『大辞林』三省堂）である。①は「仏」の側にたつものであり、②は衆生の立場にたつての謂である。もとより、物語は經典ではなく、物語の享受者は仏の教えを学ぼうとして物語に向かうわけでもない。しかし、書き手の意識としては、例えば、『蜻蛉日記』の冒頭に、

……たゞふしをきあかしくらすまゝに世中におほかるふる物語のはしな
どを見れば、世におほかるそらごとだにあり、人にもあらぬ身のうへま
で書き日記してめづらしきさまにもありなん、天下の人の品たかきやと
問はんためしにもせよかし、とおほゆるも、すぎにし年月ごろのことも
おぼつかなかりければ、さてもありぬべきことなんおほかりける。

（新日本古典文学大系 三九頁）

とあって、「天下の人の品たかきやと問はんためし」として記すのだという、明確な意識が示されているように、道綱の母の心中には押えがたい執筆の意図が秘められていたはずである。『蜻蛉日記』においては、右の引用文にあるように、直接的には「世におほかるふる物語」などには「そらごと」が多く、現実の世での出来事とは大きく異なるという気持ちで執筆へ向かわせたという形をとっているのであるが、それは同時に、「そらごと」の多い「ふる物語」に興味と関心をもって過ごしてきた自分自身の半生に対する反省の弁であり、自らの現実の生活を示すことで、高貴な身分にある女性の実態を知ってほしいということでもあった。

もとより、道綱の母が体験した現実の生活にしても、高貴な女性の一人の例でしかありえず、『蜻蛉日記』の中にいわば「望ましき真の生」なるものが示されているわけではなく、示しようもないであろう。彼女にとっては抜き差しならぬ現実の日々を送ってきたわけであるが、その生もまた「真の生」

に対する「方便」の一つでしかありえない。さらには、望ましき「真の生」を目指すとしても、彼女ひとりでは実現しうるものでもなく、彼女をとりまく様々な状況の中において克服していかなければならない。また「おほかるふる物語」にのみ「そらごと」があるのではなく、彼女の人生そのものにもいわば「そらごと」と思わざるをえない現実的状况があるということでもあろう。理想的な別世界が存在するわけでもない。不本意ではあっても、具体的に現実的な日々の営みを通して、常に他者との関わりにおいて「真の生」なるものを模索していくしかないからである。『蜻蛉日記』が現実のこまごまとした生活の記述をつらねていくのも、そしてその果てに「かうながらへ、今日になりけるもあさましう、御魂など見るにも、例のつきせぬことにおぼれてぞはてにける」（二三八頁）という感慨をもって日記をしめくくらするをえないのも、そうした理由によるのである。

『源氏物語』においても同様のことが言えるであろう。光源氏との理想的な愛情生活を築き上げていった「紫の上」にしても、光源氏との愛を中心とした関わりを度外視しては、紫の上の立場はありえず、それも他者との関わりにおいて確認していくしか方法はないのであって、愛に結ばれた理想的なありかたと、その脆さが、紫の上を通して描かれているのである。

すでに、紫の上については、「登場のあり方」（人物像の造型上の問題）などを中心に従来さまざまに論じられてきており、それらの具体的な場面の解釈については、もはや補完すべき事柄はないようにも思われるほどである。しかし、そうした「登場のあり方」にしても、「人物像の造型上の問題」にしても、特に後者においては、それぞれの場面での紫の上をめぐる詳述は、どのような目的のもとに為されているのかによって、その意味合いには差異が生じてくることになる。³⁾ すなわち、それぞれの場面での記述は、ある目的を達するため便宜的に用いられた「方便」とみなしうるからである。

宇治十帖に登場する「浮舟」が、薫と匂宮との間で苦惱して入水したと思われていた事件が、以下の記述によって、じつは物の怪による仕業であった

と知らされることになる。

「おのれは、ここまで参うて来て、かく調ぜられたてまつるべき身にもあらず。昔は、行ひせし法師の、いささかなる世に恨みをとどめて漂ひ歩きしほどに、よき女のあまた住みたまひし所に住みつきて、かたへは失ひてしに、この人は、心と世を恨みたまひて、我いかで死なん、といふことを、夜昼のたまひしに頼りをえて、いと暗き夜、独りものしたまひしをとりてしなり。されど、観音とさまかうさまにはぐくみたまひければ、この僧都に負けたてまつりぬ。今はまかりなん」とのしる。

(手習 六一二八三)

薫に不満を抱きながら宇治の大君が逝去したことも、浮舟の失踪事件も、すべては「物の怪」の仕業であった、という読みを後になつて我々に強いるものである。もちろん、宇治の大君が逝去した場面に物の怪が出現した形跡はなく、「世の中をことさらに厭ひはなれねとすすめたまふ仏などの、いとかく、いみじきものは思はせたまふにやあらむ、見るままにもの枯れゆくやうにて、消はてたまひぬるはいみじきわざかな」(総角 五一三一八)とあつて、死の場面はけつして異常なものではなかつた。明らかに、浮舟の登場にかかわつて捉え直され意味付けられたものではあるが、それだけに、物語を収斂していこうとしている書き手の方向が見えてこよう。

浮舟にとりついた物の怪は「行ひせし法師」であつて、「いささかなる世に恨みをとどめ」のために物の怪となつたのだといふ⁽⁴⁾とどめた「恨み」とは何であつたのだろうか。大君・浮舟などにとりついたところからすれば、あるいは女性関係の恨みとも受け取れよう。だとすれば、匂宮・薫との間で苦悩して入水を決意し、やがて出家を願ひ、それを実現していく浮舟の物語にふさわしいといえる。

また、出家を志しながらも、妹尼の故姫君の婿であつた中将の懸想を逃れるために母尼の部屋に入つて夜をすごしたときに、「姫君は、いとむつかしとのみ聞く老人のあたりにうつぶし臥して、寝も寝られず。……いと恐ろしく、

今宵この人々にや食はれなん、と思ふも、惜しからぬ身なれど、例の心弱さは……」(手習六一三二七)などと、いま世話になつてゐる老尼たちの姿に、極度の恐怖心を抱いているのは、「例の心弱さ」という説明では充分ではなく、出家を強く願ひながらも、尼の生活になじめずにいる浮舟の心中をみせている。同様に、眠れぬままに半生を振り返る心に薫のことが偲ばれ、「さすがに、この世には、ありし御さまを、よそながらだに、いつかは見んずる、とうち思ふ、なほわるの心や、かくだに思はじ、など心ひとつをかへさふ」(六一三二〇)と、匂宮ではなく、おだやかな薫の姿を慕う心が浮上してきて、それをあわてて打ち消したりしている。

その直後に、下山してきた僧都に懇願して出家する浮舟ではあるが、浮舟の心は、決して安定はしていないのであつて、その翌日に、中将から贈られてきた文に思わず返歌をしたためてしまい、それを少将の尼によつて中将のもとに届けられてしまつたりもする。さらには、小野で新年を迎えた浮舟は、春のしるしも見えず、凍りわたれる水の音せぬさへ心細くて、「君にぞまどふ」とのたまひし人は、心憂しと思ひはてにたれど、なほそのをりなどのごとは忘れず、

かきくらす野山の雪をながめてもふりにしことぞ今日も悲しき

など、例の、慰めの手習を、行ひの隙にはしたまふ。我世になくて年隔たりぬるを、思ひ出づる人もあらむかしなど、思ひ出づる時も多かり。

(手習 六一三四二)

と匂宮の激しい恋情を受けた折のことなどを思い起こし、自分を思い起こしてくれる人もあつてほしい、という人恋しい気持ちを抱いているのである。

こうした浮舟の内面のゆれもあつて、浮舟の消息が薫に伝わり、夢の浮橋の巻の物語を呼び込んでいくことにもなる。一途に出家の身に徹して仏道修行に専念することもできない浮舟、忘れたはずの匂宮や薫をしのび、人を恋るのが、浮舟をめぐる物語であり、「源氏物語」が最終的に収斂していく方向

でもあったのである。

ところで、浮舟をもつて締めくくられたこうした物語の方向を、第二部の段階で示し得ているのが「紫の上」に関わる物語であった。

三 紫の上の発病

柏木の亡きあと、その妻の落葉の宮が、夕霧の懸想に悩んでいることを聞いた紫の上は、女の身を憂いて、次のように思う。

「女ばかり、身をもてなすさまもところせう、あはれなるべきものはなし。もののあはれ、をりをかききことをも見知らぬさまに引き入り沈みなどすれば、何につけてか、世に経るはええしきも、常なき世のつれづれをも慰むべきぞは。おほかたものの心を知らず、言ふかひなき者にならひたらむも、生ほしたてけむ親も、いと口惜しかるべきものにはあらずや。心のみ籠めて、無言太子とか、小法師ばらの悲しきことにする昔のたとひのやうに、あしき事よき事を思ひ知りながら埋もれなむも、言ふかひなし。わが心ながらも、よきほどにはいかでたもつべきぞ」と思しめぐらすも、今は、ただ女一宮の御ためなり。

(夕霧 四一四四二)

この心中思惟は、およそ紫の上のそれとは思われないほど、女性の身のもてなし方についての率直な主張となっている。それは、「もののあはれ、をりをかききことを」知る女性として光源氏に認められてきた朝顔や六条御息所の資質を認めることでもあるが、直接的には夕霧の懸想に困惑している落葉の宮を意識することから導かれた思いではある。しかし、それは同時に、「紫の上」自身が今まで保ってきた謙虚な振舞いを否定する方向ともなっていることに注目しなければならない。

女性も、自主的・積極的に生きていくべきであることを肯定しようとする強い意識の提示であるが、その思いが、死を意識したときに、取り返しのつかない悔しきとなって、ふつつつと湧いてきたのであろう。幼き日に、光源

氏のもとに連れてこられ、以後、光源氏の庇護のもとに日々をすごしてきた紫の上が、女性も一人の人間として認められ、自立し、幸福を求めるべきであると自覚したのである。こうした自立した女性像は、はるか以前の「雨夜の品定め」において、中の品の女性の称揚として、男たちによって語られていたことでもあったのだが、雨夜の品定めでの女性談義は、ここでの紫の上の思念によって、女性の側からも受けとめられたことになるのである。⁽⁵⁾

だが、そうした思いに至るには、紫の上は自分自身の人生のほとんどを費やさなければならなかった。また、あれほど相思相愛の恋を交わせた夕霧と雲居の雁の夫婦であったにもかかわらず、落葉の宮への夕霧の懸想によって、それが脆くも崩れようとしている状況を目の当たりにしなければならなかった。さらには、死してなお、光源氏に関わる女性たち——紫の上自身をも含めて——に挑み続けずにはおれない六条御息所の物の怪の出現をも招来しなければならなかったのである。

紫の上に、六条御息所の物の怪が襲いかかったのは、若菜下の巻であった。光源氏が、紫の上を相手に、亡き六条御息所について、次のように語っている。

「……中宮の御母御息所なん、さまことに心深くなまめかしき例にはまづ思ひ出でらるれど、人見えにくく、苦しかりしさまになんありし。恨むべきふしぞ、げにことわりとおぼゆるふしを、やがて長く思ひつめて深く怨ぜられしこそ、いと苦しかりしか。心ゆるびなく恥づかしくて、我も人もうちたゆみ、朝夕の睡びをかさはさむには、いとつつましきところのありしかば、うちとけては見おとさることやなど、あまりつくるひしほどに、やがて隔たりし仲ぞかし。いとあるまじき名を立ちて、身のあはあはしくなりぬる嘆きを、いみじく思ひしめたまへりしがいとほしく、げに、人柄を思ひしも、我罪ある心地してやみにし慰めに、中宮を、かく、さるべき契りとはいひながら、とりたてて、世の譏り、人の恨みをも知らず心寄せたてまつるを、かの世ながらも見なほされぬらむ。今

も昔も、なほざりなる心のすさびに、いとほしく悔しきことも多くなると、来し方の人の御上、すこしづつのたまひ出でて、……。

(若菜下 四一—二〇〇)

六条御息所の人となりについて、「さまことに心深くなまめかしき」人であったとの賞賛をおくりつつも、「人見えにくく、苦しかりしさま」「長く思ひつめて深く怨ぜられし」ことなどを短所として挙げ、氣詰りで、執念深い人柄を、紫の上に向かって率直に語っているのである。その六条御息所に比して、紫の上については、その直後に、

「君こそは、さすがに限なきにはあらぬものから、人により事にしたがひ、いとよく二筋に心づかひはしたまひけれ。さらに、こころ見れど、御ありさまに似たる人はなかりけり。いと気色こそものしたまへ」と、ほほ笑みて聞こえたまふ。

(若菜下 四一—二〇二)

と、嫉妬心のあることは指摘しながらも、状況に敏感に対応して振舞うことのできる聡明さを讃えている。むろん、ここで光源氏が誉めている紫の上の賢さは、あくまでも男性である光源氏の感性をとおしてのものである。

だが、六条御息所の物の怪は、紫の上の心中のごまかしを暴くものであって、御息所の物の怪出現の理由もそこにあつた。すなわち、同様に光源氏の多情に悩み続けた六条御息所の物の怪を出現させることによつて、女三宮の降嫁に悩み、心中には嫉妬と苦渋を味わいながらも、それを表面には出さずに振舞おうとしている紫の上の内面を、あぶり出してしまうことになっているからである。光源氏は、紫の上を誉めた直後に、女三宮のところに女樂でみごとに琴を演奏したことを讀えに出かけるのであるが、その時の女三宮の様子には、「我に心おく人やあらむ、とも思したららず、いといたく若びて、ひとへに御琴に心入れておはす」(同)という無邪気な有様であり、光源氏はその女三宮と、その夜を共にするのである。

そして、その夜、眠れぬままに物語を読ませ、自らの半生を回顧しつついた紫の上は発病することとなる。

対には、例のおはしまさぬ夜は、宵居したまひて、人々に物語など読ませて聞きたまふ。「かく、世のたとひに言ひ集めたる昔語どもにも、あだなる男、色好み、二心ある人にかかづらひたる女、かやうなる事を言ひ集めたるにも、つひによる方ありてこそあめれ、あやしく浮きても過ぐしつるありさまかな。げに、のたまひつるやうに、人よりことなる宿世もありける身ながら、人の忍びがたく飽かぬことにするもの思ひ離れぬ身にてややみなむとすらん。あぢきなくもあるかな」など、思ひつづけて、夜更けて大殿籠りぬる暁方より御胸を悩みたまふ。

(若菜下 四一—二〇三)

この論の冒頭に掲げた〔物語論〕と対応するかのようには、物語に寄せる意識が引金となつて、孤独な紫の上の心を揺さぶっていく。〔物語論〕において「そらごと」とされたその物語にも劣る自分の現在の生を思うとき、「あぢきなくもあるかな」という絶望が、紫の上の心を深く浸していく。その果ての発病は、いわば紫の上自身が呼び込んだものでもあつた。

四 紫の上の物の怪の出現

死を望む浮舟に物の怪が入り込んだように、自分の人生に望みをなくした紫の上に物の怪がとりついた。「是、六条御息所の霊のなすわざ也。さきに此人のうわざありしについて出来たる也」という『湖月抄』の指摘もあるように、この物の怪は六条御息所であつた。

「……生きての世に、人よりおとして思し棄てしよりも、思ふどちの御物語のついでに、心よからず憎かりしありさまをのたまひ出でたりしなむいとうらめしく。……この人(紫の上)を、深く憎しと思ひきこゆることはなけれど、まもり強く、いと御あたり遠き心地してえ近づき参らず、御声をだにほのかになむ聞きはべる。よし、今は、この罪軽むばかりのわざをせさせたまへ。……中宮にも、このよしを伝へきこえたまへ。ゆめ御宮仕のほどに、人ときしるふそねむ心つかひたまふな。……」

光源氏が、愛する紫の上に向かつて六条御息所の「人見えにくく、苦しかりし」人柄について語ったことに對しての恨みを述べるための物の怪の出現であり、紫の上本人を怨んでのことではないという。

六条御息所の物の怪であることを確認した光源氏は、紫の上が蘇生した後も不安に陥り、「女の身はみな同じ罪深きもとゑぞかしと、なべての世の middle とはしく」(若菜下 四一二三)と思われ、六条御息所ひとりに留まらず、女の身の罪の深さを知らされるとともに、光源氏自身の半生をも激しく揺り動かすことになる。

光源氏は、紫の上の「人により事にしたがひ、いとよく二筋に心づかひ」することの出来る人柄を賞賛していたのであり、そのように温和にすごしてくることを女性に求めてきたのである。ところが、紫の上はすでに、そうした姿勢を保つてきた自らの半生に深い疑問を抱いており、そのことが発病の因子ともなっていたのだが、そのことを光源氏は熟知しえないでいる。やがて、女性の自主的な生き方を切望する思いを抱くことになる紫の上の心中など、光源氏は予想しうるはずもない。そのような状況の中で六条御息所の物の怪の出現である。光源氏の理解が「女の身はみな同じ罪深きもとゑぞかし」という表面的なところに留まったままであって、物の怪と化して光源氏に訴えようとしている六条御息所の願い——自立した女性の一人としての認知——など判ろうはずがないのである。

そうした光源氏をさらに置き去りにするかのようには、臙月夜の尚侍、朝顔の斎院と、続けて出家していく。それらに對する光源氏の対応は、「女子を生ほしたてむことよ、いと難かるべきわざなりけり。宿世などいふらむものは目に見えぬわざにて、親の心にまかせ難し」(若菜下 四一二五三)という、女子を育てることの難しさ、という意識に終始しているにすぎない。

そうした光源氏の困惑した状態を見透かすかのように、女三宮までもが、父朱雀院の手によつて落飾することとなった。しかも、女三宮の出家には、

またはや六条御息所の物の怪が関与していたのである。

後夜の御加持に、御物の怪出で来て、「かうぞあるよ。いとかしこう取り返しつと、一人をば思したりしが、いと妬かりしかば、このわたりにさりげなくてなん日ごろさぶらひつる。今は帰りなん」とてうち笑ふ。いとあさましう、さは、この物の怪のここにも離れざりけるにやあらんと思すに、いとほしう悔しう思さる。

(柏木 四一三〇〇)

六条御息所の物の怪が、紫の上が蘇生したことが悔しくて、女三宮を出家に追いやったということを告げたのである。思えば、夕顔・葵の上・紫の上・女三宮と、光源氏と関わった主要な女性たちの上に、ことごとく六条御息所は物の怪となつて出現し、光源氏の生き方に対して警告を発し続けてきたのであった。

これほどまでに激しい執念を伴つて、六条御息所が光源氏に迫るのは、何故であろうか。それは、同じく皇族の出身ながら、光源氏と一定の距離を保つてきた朝顔の斎院と比較することで判明しうるところがあろう。前もつて事のならゆきを予想して抑制することのできた朝顔と、それを知りつつも叶わなかつた六条御息所、それだけに六条御息所には、光源氏に對すると同じく、己れ自身に向けての悔しさもあつたのであり、そのあたりの心中描写は物語中にもしばしば繰り返されていたことであつた。

もう一つの対応方法があつた。それは、夕霧に懸想され、困惑しつつも、彼の庇護をうけなければならぬ落葉の宮の場合である。

のぼりにし峰の煙にたちまじり思はぬかたになびかずもがな

……かくもて騒がざらむにてだに、何の惜しげある身にてかをこがましう若々しきやうにはひき忍ばむ。人聞きもうたて思すまじかべきわざを」と思せば、その本意のごともしたまはず。

(夕霧 四一四四九)

落葉の宮は、「思はぬかたになびかずもがな」と切望しつつも、夕霧の庇護を受けなければ生きていけない自分の境遇に絶望し、現世への執着をすてることで、現状に對応していかなければならぬわが身を見つめている。出家し

たくとも、父朱雀院に「いとあるまじきことなり。……後見なき人なむ、なかなかさるさまにてあるまじき名を立ち、罪得がましき時、この世後の世、中空にもどかしき咎負ふわざなる」(夕霧 四一四四五)と諫められ、身動きのつかない状況にあつたからである。

物の怪と化しても、己の苦衷を主張し続ける六条御息所、夕霧に庇護を受けながらもすでに現世に生きる意欲を消滅させることで対処しようとしている落葉の宮——空蟬がそうであつたように——、一定の距離内には入ろうとしない朝顔の斎院、方法と置かれた状況は異なるものの、それぞれの意志を精一杯つらぬこうとしているのである。そして、そうした各々の姿勢と状況を見せつけているのが、六条御息所の物の怪が担つた役割でもあつたのである。

五 御法の巻の位相

夕霧の巻で「落葉の宮」が夕霧からの懸想を受け、困惑しつつも結局は夕霧の思惑に負けてしまわざるを得ないという物語がかたられたことは、「御法」の巻の存在、さらにはその巻で「紫の上」が逝去するという内容を考える上に重要である。身の振り方に苦しむ落葉の宮の有様を知ること、紫の上が女の生き方について見詰め直すという機会が与えられることになるからである。

そうした紫の上の姿勢は、御法の巻に入っても保たれ、紫の上独自の思索が深められてゆく。紫の上が、病の中でわが身を振り返る、御法の巻の冒頭を引いてみよう。

紫の上、いたうわづらひたまひし御心地の後、いとあつしくなりたまひて、そこはかとなく悩みわたりたまふこと久しくなりぬ。……みづからの御心地には、この世に飽かぬことなく、うしろめたき絆だにまじらぬ御身なれば、あながちにかけてどめまほしき御命とも思されぬを、年ごろの御契りかけ離れ、思ひ嘆かせたてまつらむことのみぞ、人知れぬ御

心の中にもものはれに思されける。後の世のためにと、尊き事どもも多くせさせたまひつつ、いかでなほ本意あるさまになりて、しばしもかづらはむ命のほどは行ひを紛れなくと、たゆみなく思ひのたまへど、さらにゆるしきこえたまはず。(御法 四一四七九)

「うしろめたき絆」のない身ではあり、命も惜しくはないが、後に残される光源氏が思い嘆くであろうことが心にかかつている、というのである。女三宮の降嫁以後、光源氏との間に深い溝を意識してきたこと、落葉の宮と夕霧とのことを直接的なきっかけとして、女のありうべき生き方について思い詰めていた紫の上であることを思えば、自分の亡き後の光源氏の嘆きを思い、容易に死ぬこともできず、出家することも光源氏が許さないという叙述は、臘月夜の尚侍・朝顔・女三宮などの出家が集中的に記されてきている流れの中では、違和感を覚えよう。⁽¹⁾

それにもかかわらず、紫の上は、

上は、御心の中に思しめぐらすこと多かれど、さかしげに、亡からむ後などのたまひ出づることなし。(御法 四一四八七)

中宮は参りたまひなんとするを、「いましばしは御覧せよ」とも聞こえまほしう思せども、さかしきやうにもあり、内裏の御使の隙なきもわづらはしければ、さも聞こえたまはぬに、あなたにもえ渡りたまはねば、宮ぞ渡りたまひける。(御法 四一四八九)

とあるように、「さかしげ」な言動はしつかりと慎んでいるのである。女としての生き方を自覚している紫の上が、「さかしさ」に身を慎むことは、すでにこの世を諦めていることであり、光源氏が自分の亡き後に悲しむだろうということも、直接に口にして言い得ることはなかった。

この「さかしげ」という意識が、紫の上晩年のキー・ワードとなっている。紫の上は「さかしげ」な女と受け取られないように、細心の注意をはらって振舞つてきているからである。しかし、その一方において、夕霧の巻に記されていたように(女の自主性)を求める強い気持ちも抱いていた。そうした

中で、結局は「さかしげ」に映らないようにという意識のなかに取り込まれるを得なかったのが、紫の上という女性の限界であった。

そのことは、「うしろめたき絆だにまじらぬ御身なれば」と言いつつも、

三の宮は、あまたの御中に、いとをかしげにて歩きたまふを、御心地の隙には前に据ゑたてまつりたまひて、人の聞かぬ間に、「まろがはべらざらむに、思し出でなんや」と聞こえたまへば、……。

(御法 四一四八八)

「大人になりたまひなば、ここに住みたまひて、この対の前なる紅梅と桜とは、花のをりをりに心とどめてもて遊びたまへ。さるべからむをりは、仏にも奉りたまへ」と聞こえたまへば、うちうなづきて、御顔をまもりて、涙の落つべかめれば立ちておはしぬ。

(御法 四一四八九)

と三の宮(匂宮)への思いが残り、また出家を願いながらも、女一の宮をも含めた明石の中宮腹の皇子・皇女たちの将来の様子を見てみたい、という現世への思いが記されていることとも対応している。

こうした、一見矛盾した心を抱き、出家という光源氏との思いきつた決別も出来ないままに悩んでいる、というのが紫の上に付与された心意なのである。それは、現世に生きる人間としての、やむにやまれぬ心の動きである、という了解による。むしろそうした心の振幅こそが、死期を目前にした人の心のありようということでもある。そうであるからこそ、紫の上の「いとかりそめに世を思ひたまへる気色、似るものなく心苦しく、すずるにも悲し」(御法 四一四九〇)という死と直面した記述も、すんなりと受け入れられることになるのだが、同時にそれは、光源氏との愛の世界を築き上げてきた紫の上の物語の限界でもあった。紫の上に芽生えた意識をしっかりと受け止めて展開していくのは「浮舟」という女性であり、それに先だつ宇治の大君なども含めた「宇治十帖の物語」を待たねばならなかった。

こうした紫の上の意識に呼応するかのようには、光源氏は、紫の上の亡き後も、すつきりと出家することはできないでいる。

後るとも幾世かは経べき、かかる悲しさの紛れに、昔よりの御本意も遂げてまほしく思ほせど、心弱き後の譏りを思せば、このほど過ぐさんとしたまふに、胸のせきあぐるぞたへがたかりける。

(御法 四一四九七)

光源氏にとつても出家は年来の願いでありながら、「心弱き後の譏り」を憚つて、紫の上の逝去にともなう出家であるという非難を受ける期間を避けようということである。

一方、紫の上が逝去した直後に、光源氏とともにその死顔を見た夕霧によって、かつて野分の巻で紫の上を垣間見たことが、「いにしへの秋の夕の恋しきにいまはと見えしあけぐれの夢」(御法 四一四九八)と回想される場面が挿入される。夕霧にとつて、紫の上は義理の母である。その紫の上を、父の光源氏とともに死顔を見つめるといふのは正常とはいえない。死後であるから問題は起こらないものの、野分の巻での垣間見を思い起こさせていることから、光源氏が藤壺に対して犯した罪の報復が、いつでも発展可能な状況にあったことを改めて示している。夕霧という人物を通して、雲居の雁との不和、落葉の宮との婚姻、そして未然ではあったが紫の上との危うき関わりの可能性など、物語は激しい起伏をみせているのである。

そうした中であつて、出家もままならぬほどにひたすら悲嘆にくれている光源氏の姿が点綴される。

……人には異なりける身ながら、いはけなきほどより、悲しく常なき世を思ひ知るべく仏などのすすめたまひける身を、心強く過ぐして、つひに來し方行く先も例あらじとおぼゆる悲しさを見るかな。今は、この世にうしろめたきこと残らずなりぬ。ひたみちに行ひにおもむきなんに障りどころあるまじきを、いとかくをさめん方なき心まどひにては、願はん道にも入りがたくや」とややましきを、「この思ひすこしなのために、忘れさせたまへ」と、阿弥陀仏を念じたてまつりたまふ。

(御法 四一四九九)

出家を思いとどまらせている光源氏の、ここでの心中には、やや判りにくいものがあるが、紫の上の逝去による悲痛な思いのままでは出家もできない、ということであり、それは次の記述によっても確認される。

……心にかかりたまふことあるまじけれど、人にほけほけしきさまに見えじ。今さらにわが世の末にたたくなくしく心弱きまどひにて、世の中をなん背きにけると、流れとどまらん名を思しつづむになん、身を心にかせぬ嘆きをさへうち添へたまひける。

(御法 四一五〇〇)

他人の目を気にしているのである。正気の沙汰とも思われぬような状況のままに出家したのでは、好ましくない噂も流れようし、出家しても落ち着いて修行にも専念できない、ということである。すなわち、光源氏が望み通りに出家できない直接の要因は、亡き紫の上に対する供養のためでもなく、愛の深さによるものでもない。他の者の目に映る自らの姿を気にしてのことであり、「流れとどまらん名」を惜しんでのことである。

一途に出家を志し、それを実践した女三宮、あるいはそれに類する臘月夜・朝顔などと比較してみると、たとえ理想的な精神状態を期していることとはいえ、「流れとどまらん名」をひたすら気にしている光源氏の姿勢は、紫の上を初めとする女性たちとの意識に比して大きな落差を生んでいる。それが妻に先立たれ者に課せられた哀悼の日々であったとしてもである。

ただ、そうした中であつて、

昔、大將の御母上亡せたまへりしもこのころの事ぞかし、と思し出づるに、いともの悲しく、……。

(御法 四一五〇〇)

と致仕の大臣が、紫の上と同じ時期の八月に死んだ葵の上を偲び、紫の上への追悼の文を届けてくる。さらには、

……(紫の上は)はかなくし出でたまふ事も、何ごとにつけても世にほめられ、心にくく、をりふしにつけつづらうらうじく、あり難かりし人の御心ばへなりかし。……年ごろ睦ましく仕うまつり馴れつる人々、しほしも残れる命恨めしきことを嘆きつづ、尼になり、この世の外の山住

みなどに思ひ立つもありけり。

(御法 四一五〇二)

と、生前の紫の上の人柄を慕い、尼になり、山に籠るような人々も出てきたという。紫の上の死を悼む、いわば最大の記述といふべきであろう。

しかし、この期に及んでも、光源氏は人聞きをはばかりて出家も出来ないでいるのである。

……千年をももるともにと思ししかど、限りある別れぞいと口惜しきわざなりける。今は蓮の露も他事に紛るまじく、後の世をと、ひたみちに思し立つことたゆみなし。されど人聞きを憚りたまふなん、あぢきなかりける。

(御法 四一五〇四)

女の生き方を心に自問しながら、出家することも叶わずに死を迎えた紫の上の心中を思うとき、「人聞きを憚りたまふ」ことに終始している光源氏の態度は、光源氏と紫の上という、男と女との性差を越えて、物語の流れに対して独り光源氏のみが棹をさしている、という印象をぬぐえない。それほどまでに、光源氏という男の内心をあばき出すことに筆が費されているのである。また、御法の巻での一年間の季節の巡りと、和歌の多用による叙述も、光源氏との関わりにおいては既に新たな展開は断念され、その終焉を飾るに相応しいものとしての機能が与えられていたにすぎない。

落葉の宮とのことで、雲居雁との不仲をも辞せず契りを結ぶ夕霧の態度、あるいは、宇治の物語において、浮舟の心中を思おうともせず、妹尼の亡き娘の婿であつた中将が、浮舟に懸想を繰り返す場面を描いてみせること、遡って、秋好中宮に対しても朱雀院が思いを寄せたこと、さらには光源氏自身が藤壺に対して犯した密通も含めて、いわば「男の性」としか言いようのない、女に対して強引に迫る場面が物語全体を通して繰り返し描かれてきたのである。そうした男の性に対する女の抵抗が、少しずつその色を濃くさせながら物語の底流を覆いつつあつたことである。夕霧の落葉の宮に対する暴挙は、そうした物語の底流をきわだたせるための念押しであり、そうした男の性の配置が、紫の上の意識を変え深めさせていく上で必要であつたの

である。

六 まとめ

紫の上は、光源氏の愛に支えられることで、物語上にその存在を示した女性であった。死の直前まで出家することも許されず、尼になることも光源氏の愛のもとではその価値を認められず、終生、光源氏とともに歩んだ唯一の女性であった。紫の上が逝去する御法の巻、紫の上の死を悼んで一年間を喪に服して偲び続ける幻の巻での光源氏の姿には、紫の上に寄せる妄執とも思えるほどの、ほぼ絶対的な愛情が存在したことに疑いはない。

だが、紫の上の立場から見ると、光源氏の愛をそのまま信じきることはできなかった。というよりも、男と女の意識の差に苦しみ、「女の真の生」とは何か、という疑問を抱かざるを得ない状況に立たされていた。それを紫の上に直接的に投げかける要因となったのは、言うまでもなく女三宮の降嫁ではあったが、あったのだが、さらに具体的には、女三宮の降嫁による光源氏の態度の変化ではなく、降嫁によってもたらされた紫の上自身の心の内部の変容にあった。もとより光源氏への不信感もあっただろうが、それ以上に、自然に振舞おうとすればするほど、口を広げていく自身の心のほころびにあり、男と女という性差のゆえに生じ続ける如何ともしがたいジレンマというべきであろう。

そうした紫の上の意識に拍車をかけたのが、落葉の宮と夕霧との一件であった。出家もできず、自立もままならない女性の立場を突きつけられて困惑し、結局は現世への望みを棄てることで、その身を夕霧に委ねていくことになる落葉の宮の姿は、紫の上に女の生き方についての多くのものをいやが上にも考えさせることになった。それでも、紫の上は「さかしき」態度をよしとせず、心の中に矛盾を意識しながらも、光源氏への愛情をいだきつつ、彼によつて引かれたレールの上を走ることで、この世を去らざるを得なかったのである。しかも、こうした紫の上の人生自体、螢の巻での「物語論」で示さ

れていた「方便」にすぎないのであって、物語は、それに対する正否の判断を記そうとはしていない。ただその対極に世俗の目にこだわる光源氏の姿を配置して描き続けているにすぎないのであって、それが「光源氏の物語」の限界でもあった。

紫の上が心に思いながらも実現できなかった女の生き方に対する答えは、新たに書き起こされた宇治の大君・中の君、さらには浮舟の登場を待たねばならなかった。わけても浮舟の登場によつて、『源氏物語』は女の生き方を問う一つの方向へと収斂していこうとしている。しかしそれも、決して特定の方角にむけての決着を与えようとしているわけではない。一見、相矛盾する心の振幅をそのまま認め、それぞれの苦悩の末に自らの進むべきありようを、自らの意志で見出し出そうとする姿勢と行爲とを記していくのである。そして、それもすべて、いわば「望ましい人生」に対する「方便」なのであった。

いくつかの型を援用することで語り始められた『源氏物語』ではあったが、その結末において、迷いつつも自覚的に生を求めゆく浮舟の態度に不信感を抱かざるをえない薫の心中を述べることで筆を擱いていることでも明かなように、もはや一定の方向性を有する型を超えた心の動きそのものを突きつけることで物語は終わっているのである。¹²⁾すべては「物語論」に示された「方便」としての「人のよきあしき」例についての記述なのであって、「女の生」を求めて苦しみ続けた紫の上も、それを更に深めていった浮舟も、また薫も、それぞれ「方便」の中にその姿を消していかざるを得ないという仕組みなのであった。

注

(1) 豊島秀範「絶対的存在の欠落——女三宮登場の意味——」(「物語史研究」所収、一九九四年五月、おふふう)参照。

(2) 後藤祥子氏に、「もし紫の上の発病が何かへの敗北ということになるとしたら、それは他ならぬ紫の上自身の自尊心との闘いによる敗北といってもよい」との指摘がある(「若菜」以後の紫の上)、『源氏物語研究』第七号、一九七九年十二月、国学院大

- 学源氏物語研究会編。「源氏物語の史的空間」所収、一九八六年、東京大学出版会。
- (3) 高橋亨氏は「若菜の巻以降の多面的な物語世界の表現構造は……自立的な必然性ゆえに他の世界に作用し、それらが連鎖的に呼応することによって、物語は主題的に展開していく」ことを指摘する(「源氏物語の〈ことば〉と〈思想〉——女三宮Ⅱ 柏木物語論——」。「国語と国文学」一九七三年二月)。「源氏物語の対位法」所収、一九八二年、東京大学出版会)。また、三谷邦明氏は「若菜の巻での物語の特質について「あらゆる若菜巻での事件は、過去に犯され、過去に侵入され、それによって過去の出来事の意味が問われている」のであり、「登場人物たちが、己れを問うたためにこそ、過去の世界が再現されるのである」と説き、さらに「第二部においては、第一部で言及する主題などは存在せず、登場人物の自己意識の相互作用の過程にしか意味は存在しない」のであって「対話による自己意識の文学を発見した」ところにその意義を認めている(「若菜巻の方法——自己認識の文学——」。「日本文学」一九七四年一〇月)。「物語文学の方法Ⅱ」所収、一九八九年、有精堂)。いずれも、若菜巻以降の第二部の物語世界の特質をえぐりつつある。
- (4) 高橋亨氏は「浮舟の入水志向にとつて、物の怪が本質的な役割を果たしていない」と指摘する(「存在感覚の思想——〈浮舟〉について——」。「日本文学」一九七五年一月)。「源氏物語の対位法」所収、一九八二年)。
- (5) 丸山キヨ子氏は「紫上の人柄は、人格として一貫性をもったものの、深化、充実として捕えうるのではない」とする(「紫上を考える」。「源氏物語の探究」第八輯、一九八三年六月、風間書房)。
- (6) 後藤祥子氏は「紫上の人物像について、「いわば存在価値意識との相克というきわめて近代的な主題の素材に、かつての幸福極まりない女主人公紫の上が選ばれた」と捉え(注2同論文)、倉田実氏は「紫の上が相対化され、存在理由が減少させられたこと」で「紫の上は述懐という場において、自己の生を自覚化していく」と説く(「紫上の論——六条院女案から発病まで——」。「学芸国語国文学」一八巻、一九八三年三月)。また、岡崎政枝氏は「紫の上の人物像を最も「近代人的自我に目醒めた女性」と捉えている(九州女子大学紀要「二二一」、一九八八年三月)。
- (7) 紫の上の出家への希望に対して、三田村雅子氏は「制度としての、戒壇での正式な女性の出家が長く絶えていた時代において、「出家することが何も保証しない女の罪障観に深く閉ざされた時代」であつて、源氏物語は答えそのものよりも、「出離とは何か」を問かけ続ける対話の構造を提示しようとするのである」と指摘する(「源氏物語」。「国文学 解釈と鑑賞」一九九一年五月)。首肯したい。
- (8) 塚原明弘氏は「女三の宮降嫁から「御法」巻にかけての「紫の上の心の軌跡は、往生を志す人間の営みとして捉えなおさなければならぬ」という積極的な読みを主張する(「中古文学」五三号、一九九四年五月)。
- (9) 紫の上造型の意義について、森一郎氏は「積極的生を主張する心を裏側に秘めることによつてにじみ出た激しい心は、己の人生の晩年の痛己抑制の内的生活を源泉とするものである」と捉え(「紫上の述懐——紫上論の一節——」。「岡山大学教育学部研究集録」第四三号、一九七五年)、丸山キヨ子氏は「紫式部が自らの「体験的裏打ちをもちながら、その体験克服の姿を結晶させている」と説む(注5同論文)。また、紫の上に実子がいないことに対して、山田利博氏は「作者の心の成長過
- 程」との類似を指摘する(「紫上造形考——子供を与えられなかった意味——」。「中古文学論叢」三巻、一九八二年)。いずれも作者の思惟を想定した上での論述である。また、紫の上の子供がいなかったことについて、今井久代氏は「明石君の物語が生まれ、藤壺との恋の記憶も永遠に聖域に残り得た」とする読みを提示する(「源氏物語」における紫上の位相「国語と国文学」一九九四年一〇月)。
- (10) 関根慶子氏は「作者の出家志向が、源氏や紫上に投影して造型されている」と説く(「若菜」より「御法」にいたる紫上「源氏物語の探究」第八輯、一九八三年六月、風間書房)。これも作者の体験を重視する視点からの論である。
- (11) 藤井貞和氏は「散文の次元を超えた言語の次元が和歌を要請している」記述の実態を説く(「光源氏物語主題論」。「国語と国文学」一九七一年八月)。「源氏物語の始源と現在」所収、一九七二年、三一書房)。
- (12) 藤井貞和氏は「宇治十帖の主題はついに救済であろう。源氏物語の第一部に王権の主題を見ることができるとすれば、ここ宇治十帖においては、「王権」を「救済」と読みかえるべきである」と、宇治十帖の主題を捉えている(「王権・救済・沈黙——宇治十帖論の断章——」。「源氏物語の始源と現在」所収)。一方、関根賢司氏は、「大切なのは、物語がきわまり、一步を進めれば解体せざるをえない極限にまでまどろつて、終らざるをえなかった、そのゆえんを問い確かめること」であるとし(「物語の終焉と解体と——宇治十帖についての断章——」。「琉球大学法文学部紀要」第二〇号、一九七六年)。「物語文学論、源氏物語前後」所収、一九八〇年、桜楓社)、高橋亨氏は「浮舟物語の結末に対して「物語の思想がたどりついたところ、認識された世界を超えて、〈女〉の存在感覚そのものの世界であった」と説く(「存在感覚の思想——〈浮舟〉について——」。「日本文学」一九七五年一月)。「源氏物語の対位法」所収)。宇治十帖を要して収斂されていく主題は、以上の指摘でほぼ尽きて